

「家庭看護・福祉」の授業を発展させたスクールプロジェクトの取り組み — 学校家庭クラブ活動との連携 —

雙田珠己・堀尾千賀子^{*1}・内野哲子^{*2}・西村雅美^{*1}
矢野美由樹^{*1}・小林富代子^{*3}・嶋田悦子^{*2}・本山幸^{*4}

An Approach to a School Project Aiming to Develop Home Nursing and Welfare Classes
— In Cooperation with Family-Life Club Activities —

Tamami SODA, Chikako HORIO, Tetsuko UCHINO, Masami NISHIMURA, Miyuki YANO,
Fuyoko KOBAYASHI, Etsuko SHIMADA and Miyuki MOTOYAMA

I はじめに

ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動は、昭和53年の高等学校学習指導要領改訂以来、高等学校家庭科の特色として位置づけられてきた。高等学校学習指導要領解説書家庭編（文部科学省，2010）では、「ホームプロジェクトは、各自の生活の中から課題を見出し、課題解決を目指して主体的に計画を立てて実践する問題解決的な学習活動である。ホームプロジェクトを実践することによって、家庭科の学習で習得した知識と技術をより一層定着させ、総合化させることができ、問題解決能力と実践的態度を育てることができる」と記述されている。一方、学校家庭クラブ活動は、「ホームルーム単位や家庭科の講座単位、さらに学校としてまとまって、学校や地域の生活の中から課題を見だし、課題解決を目指して、グループで主体的に計画を立てて実践する問題解決的な学習活動である。学校家庭クラブ活動を実践することによって、学習で習得した知識や技術を、家庭生活や地域の生活の場に生かすことができ、問題解決能力と実践的態度の育成はもとより、勤労の喜びを味わわせ、社会奉仕の精神を涵養することができる」（文部科学省，2010）と定義されている。すなわち、ホームプロジェクトは、生徒一人ひとりが家庭生活を見直し、課題を見つけ解決していく学習であるのに対し、学校家庭クラブ活動は、グループで学校や地域生活の課題を見つけ、解決方法を考案し実践していく発展的な学習としてとらえることができる。ホームプロジェクトと学校家庭ク

ラブ活動を推進する全国高等学校家庭クラブ連盟（全国連盟）は、昭和28年（1953年）に設立され、全国規模での活動は今日に至っている。

本研究は、熊本県立北稜高等学校が、平成24年度学校家庭クラブ活動として取り組んだスクールプロジェクト「私たちに出来ること－福祉施設実習を通して－」について報告するものである。熊本県立北稜高等学校は、家政科学科を有する総合高校である。キャリア教育への取り組みはもとより、学校家庭クラブ活動も熱心に行っており、家政科学科1～3年全員が学校家庭クラブに会員として所属している。

本スクールプロジェクト（以下、プロジェクトと表記する）の特徴は大きく2つあげられる。1つは、プロジェクトの企画から実施までのプロセスである。プロジェクトのテーマである「高齢者の生活」は、家庭総合で取り組んだホームプロジェクトのテーマであり、「家庭看護・福祉」（本科目は、平成22年の学習指導要領改訂後、「生活と福祉」に名称変更されたが、本論文では実施時の科目名を表記する）の授業を通してこれを深く学び、問題解決型学習として学校家庭クラブ活動と連携させ、学年を超えたスクールプロジェクトへと発展させた。そして他の1つは、プロジェクトのテーマが授業実践例の少ないユニバーサルデザイン（以下UDと表記する）に関するものであり、被服分野と家庭看護・福祉分野に広く関わる複合的な内容で構成されていることである。なお、熊本大学教育学部は、生徒を対象としたUDについての講演を依頼され、ノーマライゼーションの理念とUDの重要性を解説するとともに、プロジェクトの方針決定に関わった。本プロジェクトの実施によって、共生社会に対する理解と地域社会貢献の重要性を、生徒に体験的に理解させることができたので報告する。

*1 熊本県立北稜高等学校

*2 元熊本県立北稜高等学校

*3 熊本県立北高等学校

*4 菊池市立泗水中学校

Ⅱ 方 法

1. プロジェクトの概要

まず、本プロジェクトのテーマである高齢者の生活と福祉について、学習指導要領上での扱い方を述べる。平成11年改定の学習指導要領「家庭総合」では(文部省 2000)、(3)高齢者の生活と福祉が設定され、その内容はア高齢者の心身の特徴と生活、イ高齢者の福祉、ウ高齢者の介護の基礎によって構成されている。高齢者の心身と生活の特徴を理解し、地域および社会の果たす役割を認識することが学習の目標である。続く平成21年の学習指導要領改訂では、該当箇所は、(2)子どもや高齢者との関わりと福祉として受け継がれ、ア子どもの発達と保育・福祉、イ高齢者の生活と福祉、ウ共生社会における生活と地域、として記載されている。ノーマライゼーションの理念を土台とした社会構築への理解が、重要性を増した内容と考えられる。指導に当たっては、学校家庭クラブ活動等との連携を図り、地域の実態に応じて、実際に地域の高齢者を訪問したり、学校に招いたり、福祉施設等を訪問するなどして、高齢者との触れ合いや交流などの実践的・体験的な学習活動を取り入れることが解説されている。

次に、本プロジェクトの枠組みを図1に示す。本プロジェクトは、学習指導要領の家庭総合「高齢者の生活と福祉」および専門科目「家庭看護・福祉」

の学習内容を土台に、問題解決型学習として発展させたものである。問題解決型学習への展開がスムーズに行えた理由としては、北稜高等学校が、家庭看護・福祉の授業で高齢者福祉施設における実習を行っており、受け入れ先を確保できていたことがあげられる。また、学科の生徒全員が学校家庭クラブ会員であり、家庭看護・福祉を学ぶ生徒は、学年を超えて連携することが可能であったことも、実現性を高める上で有効に働いた。

図1に示すように、プロジェクトの目標設定は、高齢者の日常生活の中から問題点を見つけ、解決方法を考え、実践を通して生活の改善を図ることである。そこにUDの視点を加え、高齢者の日常生活を観察する際の軸として設定し、その中から不具合点を発見し、生徒たちの力で改善する方法を考えていく。本プロジェクトでは、UDについての解説とプロジェクトに対する動機づけを熊本大学教育学部雙田が担当する。プロジェクトの企画と推進は、家庭科教員の指導の下に3年生が担当する。3年生は授業および高齢者福祉施設での実習を通して、UDの視点から問題点を把握し、解決方法を提案する。解決方法の実現化は、学校家庭クラブ活動との連携により、1～3年生の実践的な活動を通して行われる。プロジェクトに参加することを通して、生徒は解決の成果を知ると同時に、社会の一員として具体的に何ができるかを実践的に学ぶことができる。

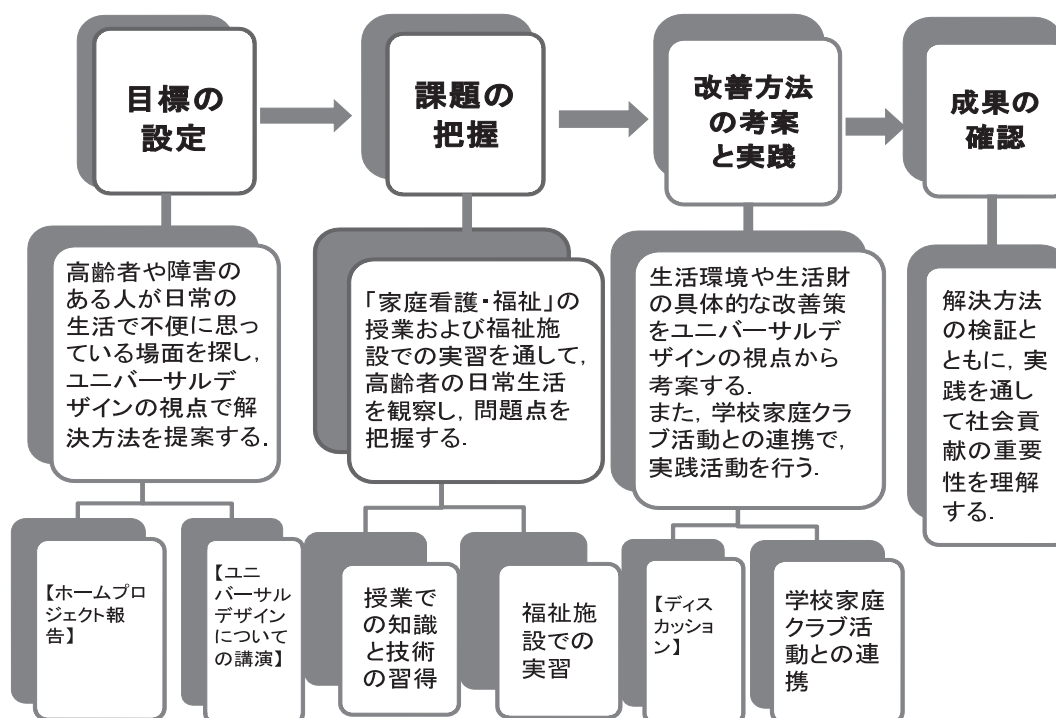


図1 プロジェクトの概要

2. プロジェクトの内容と期間

表1にプロジェクトの具体的な内容と実施期間を示す。プロジェクトの開始は2012年4月であった。目標の設定は家庭看護・福祉の授業を履修する3年生13名が中心となり、ホームプロジェクトの研究報告およびUDの講演を資料として、ディスカッションを重ねて決定した。

生徒らは高齢者と一緒に暮らしていない場合も多く、高齢者への理解が共有できなかったため、授業時間を活用してA高齢者福祉施設（特別養護老人ホーム、玉名市）を3回訪問し、高齢者との交流を図ることから取り組んだ。8月には、福祉施設での1日実習を2回実施し、生活支援を体験しながら、UDの視点から高齢者の生活を見直した。

課題の把握としては、介護用エプロンの不具合や、車椅子のフットレストの危険性など、実践を通して経験した問題があげられた。課題の解決としては、自分たちの力で不具合点を改善することができることを前提とし、使用者の心を和ませ、安全性の高い

フットレストカバーの考案とその製作に決定した。A高齢者福祉施設の車椅子80台全てにフットレストカバーをつけることを目標とし、160個の製作を決定した。フットレストカバーの製作は、学校家庭クラブ活動と連携して行われ、1～2年生99名が作業を分担して取り組んだ。3年生は作業を簡便化するため工程表を作成し、技術の習熟度に応じて人員の配置を行った。約2カ月を要して作品製作は終了し、2012年10月、福祉施設に贈呈することをもってプロジェクトは完了した。

なお、本プロジェクトの成果は、2012年度熊本県高等学校家庭科クラブ連盟研究発表大会で報告した。

III 実践報告と考察

表1に示した実践内容に沿って、生徒の取り組みの様子と成果を報告する。

1. 目標の設定

(1)研究の動機と資料収集

①ホームプロジェクト発表会

2011年度は食生活、保育、福祉分野の発表が行われ、「高齢者の安心、安全な生活」をテーマに、高齢者のための食事や生活環境についての研究が発表された（写真1）。



写真1 ホームプロジェクト発表会

②家政科学科講演会（写真2）

家政科学科講演会は、新入生のオリエンテーションとして学科が独自に企画する講演会である。例年は生活関連産業で活躍されている方を講師に招き、家庭の専門科目への意欲向上や意義を実感させることを目標に設定している。しかし、2012年度は、これをプロジェクトの導入として位置づけ、熊本大学教育学部にUDについての講演を依頼し、研究協力者として雙田が担当した。講演のタイトルは「ユニバーサルデザインって何だろう」とし、ノーマライ

表1 プロジェクトの内容と期間

目的	内容	期間
1.目標の設定	(1)研究の動機と資料収集 ①ホームプロジェクト発表会 ②家政科学科講演会 (2)プロジェクトの企画検討	2012年3月 2012年4月 2012年4 ～5月
2.課題の把握	(1)高齢者福祉施設での交流実習(3回) 課題:利用者の名前を覚え、自分たちの名前も覚えてもらう 第1回 オリエンテーション 第2回 自己紹介カードと一緒に遊べる遊具を製作し、コミュニケーションを広げる。 第3回 レクレーション(童謡を歌う、手作りのプレゼントを渡す等)。 (2)高齢者福祉施設での1日実習(2日間)	2012年6～7 月 2012年8月
3.改善方法の考案と実践	(1)ディスカッション:利用者の生活環境を見直し、不具合点の改善を考える (2)フットレストカバーの考案と製作方法の検討 (3)フットレストカバーの製作活動	2012年9月 2012年9～ 10月
4.成果の確認	(1)フットレストカバーの贈呈、プロジェクト成果の確認 (2)プロジェクト成果のまとめと第59回熊本県家庭科クラブ研究発表会での報告	2012年10月 2012年11月



写真2 家政科学科講演会

ゼーションとUDの理念を解説した。食食用介助エプロンの開発を例に、UDは具体的な方法というよりもアイデアであり、アイデアは日常生活の不具合を解消したいという気持ちの中から生まれることを伝えた。

(2)プロジェクトの企画検討

3年生の選択授業「家庭看護・福祉」を受講している生徒を中心に、企画の検討を進めた。ユニバーサルデザインの視点で「ものづくり」をしたいという生徒の意見があり、授業を通して研究を深めることを決定した。

2. 問題点の把握

(1)高齢者福祉施設での交流実習

授業を進める中で、祖父母と暮らす経験のない生徒の多くは、高齢者の生活に対する知識や理解が不十分であるように思われた。そこで、高齢者福祉施設に協力を仰ぎ、施設訪問を授業に組み入れた。通常、福祉施設実習は、福祉施設への関心を高め職業観を育成することを目標に、地域の特別養護老人ホームで夏休みに1日のみ実施する。しかし、今回は、高齢者とのコミュニケーションや、生活の様子を観察する実習を1学期に3回行い、夏休みの1日実習の充実を図った。

●第1回 オリエンテーション

施設側から「利用者の名前を覚え、自分たちの名前も覚えてもらう」という目標が設定された。生徒たちは、当初、この目標設定にさほど難しさを感じていないようであった。しかし、実際に利用者と接すると、会話は続かず、相手の名前を聞くことさえできなかつた。生徒たちは、自分の名前を覚えてもらうことが予想以上に困難であることを認識した。

●第2回 自己紹介カードと一緒に遊べる遊具を製作し、コミュニケーションを広げる。

コミュニケーションツールとして自己紹介カードと遊具を製作し、2回目の実習で活用した。利用者

に自己紹介カードを見せながら話しかけると、興味を示す人が多く、会話も弾んでいるようであった。耳からの情報に視覚からの情報を加えることで、コミュニケーションがとれたようにみえた(写真3)。



写真3 自己紹介カードを用いた活動

●第3回 レクレーション

最終回は、多くの利用者が生徒たちの顔や名前を覚えスムーズに会話が進んだ。レクレーションでは利用者にもなじみのある童謡を歌い、たくさんの人が声を出してくれたことに生徒たちは感動した。施設担当者からは、利用者の多くが生徒達の訪問自体を喜んでおり、普段より元気に過ごしていることが伝えられた(写真4)。



写真4 レクレーション

3回の活動を通して、生徒たちは、自分たちが地域に貢献できる存在であることを改めて実感し、高齢者と共に生きていくことの大切さを感じているようであった。

(2)高齢者福祉施設での1日実習(2日間)

通常、高齢者福祉施設での実習は、夏休みの1日を利用し、施設の生活や職員の仕事を理解することを目指した体験実習として設定されている。しかし、本年度は実習の内容を充実させ、2日間の実習

とした。生徒たちは、食事介助や車椅子誘導を体験し、高齢者の生活支援について学んだ。食事介助では利用者との信頼関係が重要であることに気づき、スプーンにのせる食物の分量や順番に注意を払っていた。また、車椅子の誘導では、移動中に腕や足などに怪我をしないよう、絶えず声かけを行っていた。2日目にはレクレーションを行い、コミュニケーションをとりながら、高齢者の日常生活を様々な面から観察した（写真5）。



写真5 高齢者福祉施設での1日実習

3. 改善方法の考案と実践

(1)ディスカッション：利用者の生活環境を見直し、不具合点の改善を考える

実習についての生徒の感想は、「コミュニケーションをとることに自信を持ったので、日頃の生活でも、困っている人や高齢者などに積極的に声かけし、手助けができると思う。」「高齢者の生活、考え方を知り、年配の方を敬う気持ちも深まりました。」という内容が目立った。そこで、改めて「利用者のために何か役に立てることはないか」という視点から、全員でアイデアを出し合い、「ものづくり」に結びつけることを勘案して、車椅子のフットレストカバーの製作を決定した。

(2)フットレストカバーの考案と製作方法の検討

フットレストとは、車椅子に乗ったときに足を乗せる部分である。生徒たちは、実習中に車椅子の清掃をしていた時、何台かの車椅子のフットレスト部分に、厚手の靴下がつけられていることに気がついた（写真6）。職員にその理由を尋ねたところ、靴下をカバーとして使い怪我の予防をしているという回答が得られた。利用者は皮膚が薄く、フットレストの隙間から足が落ちた際に、フットレストの側面や裏面で怪我をしたりすることがある。そのため、フットレストにカバーが必要であるが、市販品がないため古い靴下を再利用し、代替させていることが

わかった。

そこで、高齢者が使って楽しい外観で、足への衝撃が少なくなるように弾力性をもたせたフットレストカバーのデザインを考えることにした。衝撃を抑える工夫としては、カバーの内側にフリースを縫いつける方法が考案された。高齢者福祉施設が所有する80台の車椅子全てに、フットレストカバーをつけることを目標とし、160個のフットレストカバー製作に取り組むことにした。学校にある余り布を使い費用をかけずに製作することを前提とし、試作を繰り返した。施設担当者から認められる試作モデルができてからは、生産工程を見直し、量産する方法を検討した。



写真6 フットレストカバーにつけられた靴下

(3)フットレストカバーの製作活動

フットレストカバー製作は、学校家庭クラブ活動との連携を図り、スクールプロジェクトとして家政科学科全員で携わった（写真7）。



写真7 作業風景（学校家庭クラブ活動との連携）

作業工程は難易度別に分割し、表面の装飾部分を1年生、フリース生地の縫合を2年生、その他の作業を3年生が担当した。フットレストカバーの表面には、カラフルな布で女子高校生の手作りを感じさせる可愛い装飾が施された。約2か月間99名が製作

に関わり、高齢者の生活に彩りを与え、足の怪我を防ぐ160個のフットレストカバーの製作が完了した(写真8)。



写真8 完成したフットレストカバー

4. 成果の確認

(1)フットレストカバーの贈呈、プロジェクト成果の確認

2012年10月下旬、老人福祉施設を訪問し、製作したフットレストカバーを贈呈した。利用者たちは、生徒たちとの再会を喜び、フットレストカバーの贈呈に感謝し、生徒たちにお礼の言葉が伝えられた。また、職員からは「フットレストで怪我をされる方が多いから、カバーがついていると助かります」と感謝の言葉が伝えられた。生徒たちは、多くの感謝の言葉をかけられ感動し、自分たちにもできることがあると実感したようであった。プロジェクトを通して、社会貢献の喜びを知りえたことは大きな収穫であった(写真9、10)。



写真9 贈呈式

現在もフットレストカバーは施設で使用されている。利用者がフットレストカバーを可愛いと感じ愛着をもっていること、怪我の防止という機能を十分果たしていることで、UDとしての条件を十分満た



写真10 フットレストカバーの使用状態

したと評価できる。その後、施設側からは、車椅子の手すり部分の損傷や座面を滑りにくくするカバーの製作依頼があった。フットレストカバーに対する満足感と利用者からの信頼の強さがうかがわれる。

(2)プロジェクト成果のまとめと、熊本県高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会での報告

本プロジェクトの成果は、2012年11月に行われた第59回熊本県高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会で報告した。UDに関する授業実践報告はいくつかみられるが(古田・夫馬 2005, 夫馬ら 2008, 雙田・鳴海 2005, 雙田・岩濱 2010)、報告数はまだ少ない。平成22年の学習指導要領では、共生社会への理解が明確に示されており、今後この分野の授業実践は重要性を増すと考えられる。また、家庭科の授業時間が削減されている現状において、いくつかの単元を複合的に組み合わせる授業は、1つの新しい方法として期待されている。本プロジェクトは、「家庭看護・福祉」の授業をベースに、学校家庭クラブ活動の連携を得られた恵まれた事例ではあるが、家庭総合を必修とする授業で、複合領域の授業に取り組む際に参考とするべき内容も多く含まれている。また、個々の特性や能力を重視する近年の家庭科教育の中で、ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動に期待される新しい展開が示唆された。

IV まとめ

本研究は、熊本県立北稜高等学校が、平成24年度学校家庭クラブ活動として取り組んだスクールプロジェクト「私たちに出来ることー福祉施設実習を通してー」について報告するものである。

プロジェクトの柱となる「高齢者の生活」は、家庭総合で取り組んだホームプロジェクトのテーマであり、「家庭看護・福祉」の授業を通してこれを深く学び、問題解決型学習として学校家庭クラブ活動と

連携させ、学年を超えたスクールプロジェクトへと発展させた。また、高齢者の生活を見つめる視点にUDを加え、ものづくりという形で提案を具体化して、被服分野と家庭看護・福祉分野を統合した内容で構成した。

生徒達は、プロジェクトを実践して人とのつながり、コミュニケーションの大切さを学んだ。また、地域や社会に対し貢献できる喜びを知り、プロジェクトの目標を達成することができた。

本論文を執筆するにあたり、学習指導要領の内容と解釈についてご助言・ご指導いただいた熊本大学教育学部家政教育学科准教授 宮瀬美津子氏に心から感謝いたします。

引用文献

- 夫馬佳代子, 渡辺光雄, 長野宏子 (2008), ユニバーサルデザインの視点からみた家庭科教育の方法に関する研究－その3「衣」領域からみたUD教育の実践－岐阜大学教育学部研究報告, 教育実践研究, 第10巻, 107-123.
- 古田典子・夫馬佳代子 (2005), 家庭科における生活創造能力の育成を目指した授業実践: 創造と自己解放の家庭科教育(4), 岐阜大学教育学部研究報告, 教育実践研究, 第7巻, 103-116.
- 文部省 (2000) 高等学校学習指導要領家庭編, 開隆堂出版株式会社, 56-60, 72-73, 166-178.
- 文部科学省 (2010) 高等学校学習指導要領家庭編. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1282000.htm, 18-24, 31-32, 89-92.
- 雙田珠己・嶋海多恵子 (2005), 肢体不自由養護学校における衣生活教育－授業計画の作成と実践による学習効果の検討－, 特殊教育学研究, 43, 215-224.
- 雙田珠己・岩濱友紀 (2010), 特別支援学校 (肢体不自由) における家庭科教育の取組 主体性を育成する衣生活教育の授業計画と実践, 熊本大学教育実践研究, 27, (2010), 33-42.